

ウイズコロナの中でアーティストたちは芸術活動に取り組んでいます。
アーツサポート関西は、みなさまのご支援を彼らに届ける活動を続けています。

ASKが助成した活動のご報告

一般助成
舞台芸術

ナナン・アナント・ウィチャクソ 影絵芝居公演「マハーバーラタ～カルナの一生」

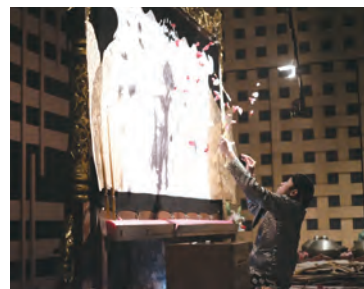
インドネシア・ジャワの伝統的影絵芝居ワヤンの人形遣い、ナナン・アナント・ウィチャクソさんの公演「マハーバーラタ～カルナの一生」が、2022年2月23日に箕面市立文化芸術劇場小ホールで開催されました。

ナナンさんは、幼少よりジャワの伝統的影絵芝居の人形遣いとして活動し、2010年にジョグジャカルタ州王家から伝統芸能の若き継承者として表彰されるなど、インドネシアの国内外で活躍してきました。数年前に日本に拠点を移し、現在は関西を中心に活動を行っています。

今回の公演では、世界三大叙事詩として知られる「マハーバーラタ」の中から、悲しい運命に翻弄されながら勇ましく生きる戦士カルナの物語をとりあげ、大阪のガムラン演奏集団、ダルマ・ブダヤによるオリジナル楽曲の演奏

とともに演じました。

舞台では、ナナンさんが、数十種類におよぶ影絵人形を使い分け、片手で人形をスクリーンの前に差し出しながら、巧みに揺り動かして人物の動きや情感を表現していきます。人物の心理的な描写や複雑なストーリーをそのようにして語るインドネシアの影絵芝居の技法に、伝統の奥深さを垣間見た思いがしました。



スクリーンの前で演技をするナナンさん

日本電通メディアアート
支援寄金助成 美術

三原聡一郎《空気の研究2022》が「KYOTO STEAM 2022」で展示

三原聡一郎さんが、アーツサポート関西「日本電通メディアアート支援寄金」の助成を受けて制作した作品《空気の研究2022》が、京都市京セラ美術館で開催された「KYOTO STEAM 2022 国際アートコンペティション」展(2022年1月29日～2月13日)で展示されました。

このコンペティションは、公募で選ばれたアーティストと企業などをマッチングし、そのコラボレーションを通して生み出されたアート作品によって、京都の新しい「知」と「感性」をグローバルに発信しようとする試みです。

三原さんは今回、mui lab株式会社と組み、同社の製品mui boardを使った体験型の作品を制作しました。mui boardは、表面にボタン類が一切ない、見た目は素朴な木片のように見える情報端末機器で、三原さんはその表面に地球上の膨大な数の都市の気象データなどの情報をリア

ルタイムに表示させる作品《空気の研究2022》を手がけました。

鑑賞者は、円形のベンチに腰をかけ、座ったままベンチを左右に回転させて、mui board上に任意の都市の座標を合わせ、その都市の情報を表示させます。この作品は、インターネットが普及した現代において、ほとんど感じられることのない国と国とを隔てる物理的な広がりや、空気存在として見立てて私たちに想像させるものとなりました。



三原聡一郎《空気の研究2022》

上町台地現代アート創造
支援寄金助成 美術

湯川洋康「アノ ヒダマリニテ」展

アーツサポート関西は、2018年に「上町台地現代アート創造支援寄金」を設け、歴史的にも文化的にも豊かな様相を内包する大阪・上町台地をテーマにした現代アート作品の制作活動を支援してきました。

2020年から2021年にかけてアーティストの湯川洋康さんを支援し、その成果報告として、展覧会「アノ ヒダマリニテ」展が大阪・北加賀谷にある「音ビル」内のTRA-TRAVELギャラリーで開催されました(2022年3月12日～19日)。

この展覧会は、湯川さんと彫刻家の葎村太一さんによる2人展として行われ、古くから人々の暮らしに影響を及ぼしてきた厄災と、宗教が果たしてきた役割との関係性に着目し、映像や平面作品など多様な形態の作品で構成されました。

銅板にエッチングの手法で毛髪の束を思わせる多数の鋭い線を刻み込んだ作品《Flower》は、毛髪のイメージと花の形象を重ね合わせた絵画的な作品で、四天王寺の西門の鳥居の中から発見された人毛の束のイメージとも結びついています。

展覧会は、太古から今に至る極楽浄土を想う無数の人々の祈りに意識を向かわせ、上町台地がその内部に宿す歴史的・文化的な重みに触れさせるような展示となりました。



湯川洋康《Flower》

一般助成
音楽

関西フィルハーモニー管弦楽団「第326回定期演奏会」

関西フィルハーモニー管弦楽団の「第326回定期演奏会」が、2022年3月25日、飯守泰次郎指揮により、大阪・福島にあるザ・シンフォニーホールで行われました。

関西フィルハーモニー管弦楽団は、2020年の創立50周年にむけ、2011年から10年をかけて、指揮者の飯守泰次郎氏とともにブルックナーの全交響曲の演奏に挑みました。このコンサートはその完成を飾るもので、本来2020年に行われる予定でしたが、コロナの影響で延期になっていました。

ブルックナーの交響曲は1番から9番までが良く知られていますが、プログラムは通常ほとんど演奏されることのないブルックナーの交響曲「第00番」と「第0番」の2曲で構成。

「第00番」はブルックナーが初めて手掛けた交響曲で、オーケストレーションの豊穡な小片がいくつもコラージュされた複雑な響きを持ち、「第0番」は一気に駆け抜けていくような躍動感に満ちた若々しい曲で、いずれもブルックナーの他の交響曲に見られる荘厳な曲調とはかなり趣の違う印象で、ブルックナーの別の一面に触れた思いがしました。

演奏からは、指揮者の飯守泰次郎氏およびオーケストラのメンバーたちの熱き想いとほとばしる情熱が伝わってきて、まさに圧巻の演奏会となりました。

今後も、披露される機会の少ない名曲の「発掘」につながる演奏会に挑み続けてもらいたいと思います。



関西フィルハーモニー管弦楽団「第326回定期演奏会」
指揮者：飯守泰次郎 photo: S. Yamamoto

一般助成
美術

荒木優光「思弁的マンネリ解消プロジェクト」の成果発表「トーキングヘッズ(仮)」

サウンドを用いたさまざまな表現活動をしているアーティストの荒木優光さんが、2021年度に取り組んだ「思弁的マンネリ解消プロジェクト」の成果発表が、2022年3月26日、兵庫県豊岡市の城崎温泉にある城崎国際アートセンターで行われました。

「思弁的マンネリ解消プロジェクト」とは、コロナ禍による行動制限を逆に契機としてとらえた荒木さんが、さらなる創造の方法論を模索しようと1年をかけて取り組んできたもの。その成果として、日常の断片をつづったテキストや、サウンドインスタレーション、ステージパフォーマンスなどからなる作品「トーキングヘッズ(仮)」を発表しました。

作品は1日限りの実施でしたが、会場となった城崎国際アートセンター内のさまざまな場所を、ひとつの物語を読み上げるナレーションでつなぎ、観客は場所を移動しながら鑑賞しました。

ステージ上では、身体動作を解析するセンサーを体につけたダンサーによるダンスの動作と、背後に設置された巨大スクリーンにCGで描出されたダンサーのアバターを同時に投影して見せる、ダンス＝映像パフォーマンスが行われました。

荒木さんは、サウンドを作品の主要な要素として用いますが、このプロジェクトでは音響だけにとどまらない空間的な視覚も重要な要素として取り込み、そこから美術および音楽の枠にとどまらない荒木さん独自の創造活動が展開されました。



荒木優光「トーキングヘッズ(仮)」 photo: Kai Maetani

一般助成
美術

野村由香さんがグループ展「transmit program 2022」に参加

現代美術アーティストの野村由香さんが京都のギャラリー@KCUA(アクア)で開催されたグループ展「transmit program 2022」(2022年4月16日～6月26日)に参加し、巨大な泥でできた作品を展示しました。

「transmit program」は、毎年、ギャラリー@KCUAを運営する京都市立芸術大学の卒業生の中で今、最も注目すべきアーティストをピックアップして紹介する展覧会です。野村さんは、人間のサイズをはるかにしのぐ泥でできた巨大な球体の塊を展示しました。

会場に入ると、作品が目の前に立ちはだかり、その存在感に圧倒されます。床には、その巨大な塊を何らかの方法で転がしてきたと思われる痕跡があちらこちらに見えます。

耳をすまし、目をこらして周りを見れば、普段あまり意識

を向けていないもののなかに小さな変化があり、それは時には美しく、また、生の意味につながる大きな流れを感じさせるものとなる……。野村さんは、そうした感覚のよりどころを探る確認作業のようなものが、自分の作品制作なのかもしれないと言います。

床の「汚れ」と、泥の塊の表面のごつごつとした表情が、展示空間に有機的な生命の力を感じさせ、すべてをその懐の内に包み込む自然の摂理の存在に触れたように思いました。



野村由香「池のかめが顔をだして潜る」 photo: 来田猛